立教大学共生社会研究センターニューズレター　PRISM -プリズム-

PRISM

No.2　2012年3月1日
発行：立教大学共生社会研究センター
住所：〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL：03-3985-4457　　FAX：03-3985-4458
E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RCCCS/

No.2, March 2012
Research Center for Cooperative Civil Societies, Rikkyo University

CONTENTS

- 3.11以降の社会と共生社会研究センター（高木 恒一）
- 住民の視点で考えるゼミナール（戸田 優輝）
- つくる・うごく・つながる（2）『市民活動のひろば』（江頭 晃子）
- 来館者よりひとこと
- 埼玉大学共生社会教育研究センターから移管される資料群
- 利用案内／問い合わせ先／アクセス
- 2011年度 センター組織
- 編集後記

3.11以降の社会と共生社会研究センター



高木恒一（共生社会研究センター長）

共生社会研究センターは２年目を終えようとしています。学内外での認知も広がりつつあり、多くの方に訪れていただき、また多くのお問い合わせをいただけるようになりました。資料をご寄贈いただいた皆様、またご利用いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

さて、この１年を振り返るとき、3.11 を抜きには語れません。あの日、センターも大きな揺れを経験し、多くの資料が棚から落下しました。幸いなことに、その時間帯には書庫に人がおらず、けが人を出さずにすみました。

その後、４月末まで大学全体が緊急事態対応となり、卒業式や入学式、各種イベントなどは中止、授業開始も５月に延期されました。このなかで３月末に「住民図書館」元館長の丸山尚さんをお迎えする予定だったセンター主催の公開講演会は中止を余儀なくされました。

震災とこれに引き続く原発事故のインパクトはあまりにも大きいものでした。しかし、そのなかで草の根の活動は大きな力を発揮し、多くの声も生み出しました。センターではご寄贈いただいているミニコミ誌のなかから震災・原発災害に関わる記事をピックアップし、そのリストをホームページで公開しています。これらの記事を少しでも読めば、マスコミが、いかにわずかなことしか伝えてないかがよくわかります。「弱者」の視点からの問題提起、長年の取り組みに根ざした原発問題への発言、国内外からの支援と復興への提言など、さまざまな声がセンターに集まる資料から涌き出しています。

こうした声は何も 3.11 で突然に涌き出したのではありません。原発の危険性を指摘する声は長年にわたり蓄積されてきました。自然災害への対応についても然りです。残念ながらこれまであまり注目されることのなかったこうした声が、ミニコミを通して人から人へ確実に伝えられてきたことの価値、そしてミニコミそのものが、多くの人の地道な努力によって保存されてきたことの価値の大きさを、いま噛みしめています。

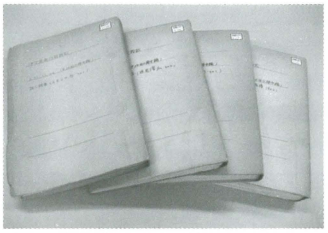
今こそこうした資料のなかにあふれている声に耳を傾け、その問題提起に真摯に向き合う必要があるのではないか。センターとして、この声をどのように社会に伝えることができるのか。そしてこのことを通して、3.11 によって白日のもとにさらされた困難をどのように乗り越え、「共生」を生み出していくのか。ピックアップされた記事を読みながら、こうした課題に取り組んでいかなければならないと強く思っているところです。

本年２月 27 日には伊方原発訴訟の弁護団長をお務めになった藤田一良弁護士をお招きして講演会を実施いたしました。この講演会は、センターが直面する課題に応える一歩だと考えています。

また、３月末には、埼玉大学からのすべての資料の移送を完了させる予定です。宇井純公害問題資料コレクション、鶴見良行文庫、各地の住民・市民運動の一次資料など多数の資料が立教に移されます。ただし、移送された資料のなかには整理が必要なものもあり、公開までに多少の時間が必要なものもあります。また、施設の移転なども検討しており、ご利用の皆様には不便をおかけすることもあるかもしれません。しかし、センターの本格稼働に向けて、着実に進んでいきたいと思います。引き続き、皆様のご支援とご協力をいただければ幸いです。

2011 年度に受け入れた主な資料群について

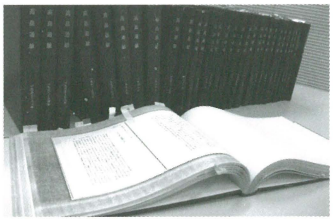
埼玉大学共生社会教育研究センターが寄贈を受け、2012 年３月に当センターに移管される予定だった伊方原発訴訟関連資料。福島原発事故を受けて、資料の存在を知ったメディア等から利用についての問い合わせが埼玉大学に寄せられました。さっそく対応について両センターで協議、利用者の利便性などを考慮して急きょ当センターへ搬送し、概要目録を作成して資料を公開しました。



伊方原発訴訟関連資料、口頭弁論調書の一部

1972 年に提訴された伊方１号炉訴訟の準備書面、口頭弁論調書、判決文、書証類などを中心とした約 350 点の資料群は、原発の安全性に関する広範な論点をカバーした日本初の原発訴訟の全貌を明らかにするもので、原発の問題を考えるにあたっての基本資料と言えるでしょう。

またこの２月、高畠通敏・元立教大学法学部教授が遺された資料の一部が、ご遺族のご厚意によりセンターに寄贈されました。その中でとくに充実したシリーズをなしているのが、1956 年から 2000 年までの 44 年間にわたり高畠教授が発表された論文、エッセイ、書評、対談などのコピーをまとめて製本し、収録論文等のリストを目次として付した全 31 巻の資料です。事務局長として深く関わった「声なき声の会」の『たより』を含めさまざまな雑誌や新聞に掲載された論考、学術論文、対談や座談会の記録のほか、ゼミ論集の「あとがき」や「高畠通敏先生の還暦に集う会」の講演録（1993 年）、講義シラバスなども収録されています。高畠政治学をより深く理解しようとする人のみならず、それぞれの時代に日本の政治をめぐって何が論じられていたのかを知りたい人にとっても貴重な資料となりそうです。



高畠通敏業績一覧、全31巻

住民の視点で考えるゼミナール



戸田 優輝（立教大学社会学部現代文化学科3年）

学部生がセンターをどのように思い、利用しているかを書いてみないか――ゼミのまとめの段階に差し掛かった頃に、担当教授からお誘いを頂きました。そこで、私が所属するゼミとセンターの関わりについて、学んだこと、感じたことを中心に紹介しようと思います。

私が所属する３年ゼミでは、共生社会研究センター長の高木恒一教授の下で都市社会学、災害社会学をテーマに活動を行っております。立教大学社会学部現代文化学科では「書を持って、街へ出よ」の言葉の下、フィールドワークを重要視しています。当ゼミでも、疑問を整理し、実際に街を歩いたり、ヒアリングに伺ったりと足を使った活動を展開しています。

2011 年３月に発生した東日本大震災の影響を受け、授業開始が５月にずれた影響もあり、当ゼミでは震災と社会学を結びつけて活動することとなりました。まずは震災社会学の基礎を学び、その後にセンターに出向き、各資料にあたり住民の長期にわたる視点で震災を捉えることを進めました。

私が初めてセンターに出向いた際の印象を正直に言うと「立教大学にこんな場所があったのか」という驚きでした。大学のキャンパスの裏口から狭い道を挟んだ場所に位置する一軒家。しかし、書庫に足を踏み入れた時に真っ先に感じたことは「まとめて積み重ねることの大切さ」でした。一般の図書館や企業が収集しないような「生の声、想い」が詰まった部屋からは、未来に残し、伝えなければならないという雰囲気が伝わってきました。ゼミの全員で資料室を見学した後、平野さん、毛塚さんがまとめて下さった震災関連のミニコミ紙を分担して内容を確認し、ゼミの教室に情報を持ち帰りました。震災を様々な住民団体の観点から見つめることは、日常のマスメディアから知る情報からは伝わらない現実が見えてきます。そこでゼミ生が興味のある切り口で班を作りグループワークをし、夏期休暇も利用して各種ミニコミ紙を深く読み進め、震災と団体の活動における疑問をまとめました。

９月からの後期では実際に発行団体に聞き取り調査に出向きました。私は区画整理などを調査する活動を行っている NPO 法人にヒアリングに伺いました。この NPO の事務所は出版社の片隅にひっそりと設置されていましたが、関連資料が棚にずらりと並んでおり、共生社会研究センターと似た雰囲気を醸し出していました。私のグループは復興街づくりをテーマに進めていますが、他にも原子力発電所問題、ボランティア、情報コミュニケーションなど、震災以前から長い年月をかけて追跡している住民団体にアプローチしています。一過性として捉えるのではなく、積み上げてきた経験を元に、それを震災でどう活かせるのか…。週１度のゼミでの報告では、様々な団体がどのような思いで向き合っているのかを共有することが出来ます。知らない世界を、更に知っていくことは、私個人としても、ゼミ全体としても有意義なことに思えます。

これらの研究から得たことは今春中にゼミ報告書の形に編集し、この文章が読まれる頃には、成果を報告できるかと思います。

私はこのゼミ活動を通して、本当に必要としている情報を見つけ出し、価値観を共有することの大切さを学びました。時間がある学生時代に多くの資料を読み深めることは、今だからこそできることでもあります。今の環境にいるからこその貴重な体験は、今後に活きていくものだと思います。

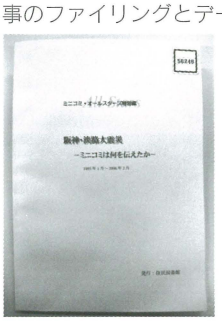
一方で、学内において共生社会研究センターの存在を知っている学部生は極めて少ないのが現状です。先に述べたように、私もゼミ活動を通して初めて知ったくらいですから、知らないまま卒業する学部生が大半なのではないでしょうか。私自身もまだまだ大学の施設を使いこなせていませんが、当センターで「様々な住民の思い」に触れられたことは、気づきを与えてくれる機会になりました。

これからの住民団体の活動と、共生社会研究センターの発展、そしてよりよい社会の持続的構築を、繋げられるように願っています。

センター所蔵ミニコミ：震災関連記事の収集について

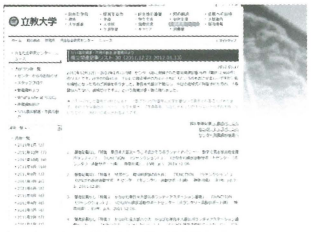
東日本大震災直後から、センターに寄せられるミニコミには震災に関するたくさんの記事が掲載されるようになりました。被災状況や原発をめぐる問題についてのみならず、女性、障がい者、子ども、そしてからだやこころにさまざまな病を抱える方が直面するであろうありとあらゆる困難や問題について、これまでの活動経験とネットワークをフルに生かした発信と、きめ細やかな支援活動が展開されたのです。

当センターのミニコミ・コレクションを構築した住民図書館の皆さんは、1995 年の阪神大震災のあと同じような状況に直面し、関連記事のファイリングとデータベース化に精力的に取り組まれました。その成果は『ミニコミ・オールスターズ特別編　阪神・淡路大震災―ミニコミは何を伝えたか―』（住民図書館、1997 年）としてまとめられています。同じように紙媒体で何かを出版することは無理にしても、とにかく記事を検索可能にし、いつでも閲覧できる体制を整えようと、閲覧室スタッフ２名でこの 11 か月ほど、試行錯誤を重ねてきました。



住民図書館発行『阪神・淡路大震災―ミニコミは何を伝えたか』

そして現在、センターでは 3.11 以降に掲載された震災関連記事がミニコミのタイトルごとにまとめてファイリングされています。ファイルボックス 11 箱分、約 3,500 点。館外からはセンターのブログに掲載されたリストを通して記事の基本情報をご覧いただくことができますし、館内ではキーワード等での検索も可能です。また上の記事にもある通り、高木ゼミの学生がこの記事を使って調査を行い、戸田さんを含む何名かは記事を通じて発行者の方にお会いし、貴重なお話を伺うことができました。



センターウェブサイト「震災関連記事リスト」

今回の震災では、ツイッターなどの新しいコミュニケーションとネットワーキングの手段が大いに注目を浴びたいっぽうで、壁新聞や手書きのチラシなどのパワーも再確認されました。また住民図書館の皆さんが手弁当で資料を収集してくださったおかげで、日本をゆるがした２つの巨大震災に際し、草の根の人びとが何を感じ、何を考え、どう動いたのかを、同時代そして後世の人びとが知るための、小さな、でも確かなドアが開かれました。ぜひいちど、そのドアを開けてみてください。



震災記事ファイル11箱

つくる・うごく・つながる(2)
『市民活動のひろば』

発行:『市民活動のひろば』発行委員会
創刊:2002年

所蔵号数:10-11,14-21,23-30,32-33,35-52,54-73,75,78,81-

江頭 晃子さん(『市民活動のひろば』発行委員会)

●もうすぐ100号!



2002年3月、東京・多摩地域(30市町村)で市民活動支援を担っていた、都立多摩社会教育会館・市民活動サービスコーナー事業が廃止となりました。市民団体間の交流や支援、市民活動資料の収集・提供を30年間にわたり担ってきた事業の廃止により、団体間のネットワークの拠点が無くなる意味は大きく、利用者と元職員が中心となりNPO法人市民活動サポートセンター・アンティ多摩を立ち上げました。アンティ多摩内に発行委員会の事務局を置き、それまで東京都で発行してきた市民活動情報誌を継続しようと『市民活動のひろば』を創刊したのが2002年6月1日です。

「多摩地域の市民活動情報誌」として年10回、毎号特集を組み(96号「足元から世界へ」、95号「人が出会ってつながれるカフェ」、94号「3・11あの時、今、これから」、93号「放射能汚染から子どもを守る」etc)、そのテーマで活動をしている3~6団体に執筆してもらっています。特集の他、コラム「ひろばの風」「映画」「憲法」「市民活動の図書館」「資料紹介」「反原発運動と私」「五味が歩けば」欄などなど。加えて「情報欄」として、この先1~2ヶ月の市民団体主催の催しや映画会など、100件前後の情報を掲載。毎号700~1000部発行で購読者、資料交換団体、執筆者等に送付しています。

●相互の応援歌

東京都で発行していたものを、財政的裏付けはなくても市民団体として発行を継続したのは、「市民活動がもっと活発になってほしい」という思いと、私たち自身が市民活動の魅力にはまっていたからです。何の権力もないけれど、多様な人の知恵と行動を結集すれば、より住みやすい・生きやすい社会に変えられることを目の当たりにしてきました。

10年発行を続けて読者の声から見えてくるのは、『ひろば』が人や活動の交流拠点となっていることです。市民活動をしている人も、そうでない人も『ひろば』を通して思いを共有したり、学びあったり、アイディアをもらったり、動き始めるきっかけをつかんだり…! 掲載記事が自分の活動分野と違っていても、何かしらの切実な思いから始まった活動の根はつながっており、他団体の課題や問題意識を知ることで、自身の活動を新たな視点で捉えたり、発見があったりもします。そして何より、「一人ではない、仲間がいる」「頑張っている人がいる」という相互の応援歌にもなっていることが大きいと感じています。

●市民活動資料を活用する場を

『ひろば』創刊の頃、もう一つ大きな課題がありました。市民活動サービスコーナーの廃止と同時に廃棄される恐れがあった市民活動資料(段ボール500箱)の保存と活用です。東京都と立川市に交渉し全部を保管できたのが2005年。続いて公開の場「市民活動資料センター」をつくろうと、2006年に「市民活動資料・情報センターをつくる会」が発足、2010年からは「資料センター基金」を創設して募金運動も始まりました。東京都時代の段ボール500箱の資料の保存・公開については、法政大学環境アーカイブズと協働する方向で進んでいます。

一方、多くの市民活動資料はその時を逃せば、過去に遡って収集するのが困難なため、現在進行形で資料を収集し続ける必要がありました。また『ひろば』発行のためにもさまざまな団体からの情報が求められ、情報は発信する場に集まってくるので、発行と収集は両輪のような活動です。2006年から「ミニコミ広場」を設け、2002年以降に収集したミニコミ1100タイトル以上を分野別にして配架し、週に1回ですが開室しています。


ミニコミ広場書架

記録としての市民活動資料と現在進行形で活用する資料の両方を収集し、資料だけでなく市民活動の拠点にもしていくことを資料センターの会は目指しています。

●見本誌お送りします

もうすぐ100号を迎える『ひろば』や資料センターの会の活動がわかる『市民アーカイブズ』など通信の見本誌をお送りしますので、どうぞお気軽にご連絡ください。そしてあなたの団体が発行している通信もお送りくださると嬉しいです。ぜひ「ミニコミ広場」にもいらしてください。

◇連絡先:190-0022 東京都立川市錦町3-1-28-301
tel/fax:042-540-1663 E-mail:hiroba2002@nifty.com
◇ミニコミ広場
(立川市幸町5-96-7「グリーンサンクチュアリ悠」敷地内)
開室日:毎週火曜日12:30~15:30(毎月最終火曜日と年末年始、夏休み中は休み)

来館者よりひとこと



すいれん舎は住民運動資料集など復刻の大半を共生社会研究センター資料に依拠してきた。当初苦戦していたこれらの資料集もここ一、二年は急激に伸び、重版する資料集まで出ている。海外でも毎年開催される北米のアジア学会で前々回あたりから住民運動資料に関心を持つ研究者が増えてきた。中国でも同様の傾向がある。ソウル大学の日本研究所では最重要研究テーマとして「日本の住民運動」が取り上げられているほどだ。

住民運動資料に対する注目が集まる中、資料拠点としての共生社会研究センターの役割はますます大きくなっている。さらなる活躍に期待をしたい。

高橋雅人さん(すいれん舎 代表取締役)


2011年10月30日、大阪マラソンでエル・ライブラリーの広報をしながら走るの図

聞いていたとはいえ、センターが本当に「ふつうのお家」だったのには仰天しましたが、スタッフお二人の対応がまさに家庭的で居心地のいいところでした。市民運動資料のアーカイブズという点では当館も同じなのに、うちとは違って資料が見事に整理されて配架してあるので感動的です。昨今話題になる原発関係の資料にしても、伊方原発訴訟の資料を保管しているアーカイブズはほかになく、貴重な記録を保存し利用できるように整理してあることがどれほど大事なことか、痛感しました。地味な仕事ですがこれからも共に頑張りましょう。

谷合佳代子さん(エル・ライブラリー<大阪産業労働資料館>館長)



本業の知識や技術を活かして、自然保護などの運動に広報役として首を突っ込むことが多い。だから、アーカイブズは一利用者の視点で「ここならあるかな?」と気にするところであるのと同時に、「ここに置いてもらえば探している人に届くかも」と希望を託す場所でもある。運動の当事者は「今、ここ」に集中し、どんどん動いていき、過去の資料をきちんと整理したり公開したりすることには力を割きにくい。新聞TVから雑誌、そして研究者へと、時間差を持って生まれてくる関心に永く応えるには、個人でいつまでも資料を抱え込んでいても埒が開かない。信頼できるアーカイブズをアテにするのが一番だ。

佐久間淳子さん(立教大学社会学部兼任講師、ライター兼編集者)



埼玉大時代からセンターの資料にはずっとお世話になってきた。70-80年代の市民運動・住民運動の関係者にインタビューに行く際には、まずセンターで資料を探す。いつでも何か手がかりが見つかる。インタビューのあとは、教えてもらった人物や運動体、ミニコミの情報をもって再びセンターの資料の森に足を踏み入れる。それが可能な理由は、センター所蔵の旧住民図書館資料やPARC資料などがそもそもそうした人と人、運動体と運動体のつながりによって生み出され、そのつながりを通じて集まってきたものだからだ。そのわずかな一端に触れた経験からも、多くのことを学ばせていただいている。

道場親信准教授(和光大学現代人間学部)

埼玉大学共生社会教育研究センターから移管される資料群

2012年3月に移管される資料は、以下の通りです。

- 「ベ平連」資料
- 宇井純公害問題資料コレクション
- 鶴見良行文庫
- 消費者問題資料
- 練馬母親連絡会資料
- 三井絹子障がい者自立運動資料
- ARE放射能汚染裁判資料
- 川崎製鉄大気汚染裁判資料
- 横浜新貨物線建設反対運動資料
- その他市民・住民運動資料

上記資料には未整理のものもあり、今後資料群ごとに、これまでの利用頻度や作業量・スペースなどの諸条件を見極めつつ公開に向けた準備を進めていきます。公開予定についてはホームページ等を通じてお知らせいたします。

【2011年度　センター組織】

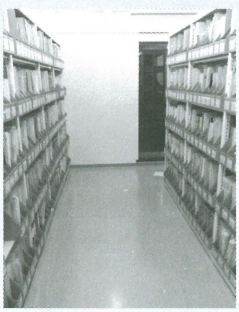
センター長　高木　恒一（立教大学社会学部教授）
運営委員会　高木　恒一（センター長、立教大学社会学部教授）
藤林　泰（副センター長、埼玉大学教授・共生社会教育研究センター長）
沼尻　晃伸（副センター長、立教大学文学部教授）
老川　慶喜（運営委員、立教大学経済学部教授）
中北　浩爾（運営委員、一橋大学大学院社会学研究科教授）
町村　敬志（運営委員、一橋大学大学院社会学研究科教授）
スタッフ　学術調査員：平野　泉
事務局：毛塚　節子

編集後記

2011年3月11日。「ニューズレターの制作を終え、シンポジウムの準備に追われていた頃だった」と第2号をつくりながら思い出していました。震災後書庫に入り、資料が書架から飛び出して床に散乱しているのを見たときには愕然としましたが、そのいっぽうで次々と震災の惨状や救援活動の必要性を語るミニコミがセンターに届きはじめました。こんなときでも、そしてこんなときだからこそ、さまざまな思いを文字と紙に託す人がいて、それを運ぶ人がいて、それを受け取り、読む人がいる。そのことに励まされた一年でした。

（平野）





センター利用案内

利用資格

とくにありません。立教大学共生社会研究センター所蔵資料の利用を希望される方は、どなたでもご利用いただけます。

開館時間

★ご利用には事前予約が必要です。
月～金曜日（祝日をのぞく）10：00-12：00、13：00-16：00
ただし、立教大学の一斉休業日のほか、資料整理などのため臨時に閉館する場合もあります。その場合はあらかじめセンターホームページなどでお知らせいたします。

閲覧

初回に簡単な利用者登録をお願いいたします。
資料は原則として閉架式です。ホームページ上で公開しているデータベース検索により、あるいはスタッフと相談のうえ閲覧を希望する資料を特定し、閲覧申請書に記載して提出してください。
閲覧に際しては、スタッフの指示に従ってください。
資料の貸し出しは原則として行ないません。

閲覧制限等

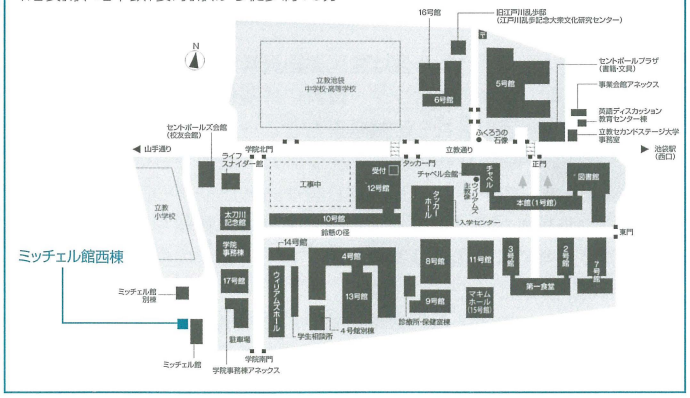
資料は原則公開ですが、プライバシー侵害の有無や資料保存の観点などから閲覧を制限する場合があります。詳しくは下記までお問い合わせください。

【お問い合わせ・ご予約は】

立教大学共生社会研究センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1（ミッチェル館西棟）
電話：03-3985-4457　FAX：03-3985-4458
E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp

【センターへのアクセス】

JR・私鉄・地下鉄各線
「池袋」駅・地下鉄「要町」駅から徒歩約10分



PRISM — A Newsletter of Research Center for Cooperative Civil Societies — No.2, March 2012
3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, Japan 171-8501
Tel: +81-3-3985-4457　Fax: +81-3-3985-4458
E-mail: kyousei@rikkyo.ac.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RCCCS/

立教大学
RIKKYO UNIVERSITY